

<b>Title</b>	玉鬘十帖と伊勢物語四十九段：「いもうとむつび」の物語史(谷山茂名誉教授喜寿記念号)
<b>Author</b>	西, 耕生
<b>Citation</b>	文学史研究. 29 卷, p.72-81.
<b>Issue Date</b>	1988-12
<b>ISSN</b>	0389-9772
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学国語国文学研究室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 玉鬘十帖と伊勢物語四十九段

—「いもうとむつび」の物語史—

西 耕 生

北の対におはするはいもうとなり。右のおとどの大殿の御かたの一つ御腹のおとうと、はらからなれど異腹にて疎かりけるを、いもうとむつびして忍びて迎へ取りて通ひ給ひしなり。

〔宇津保物語 蔵開下 角川文庫、引用は以下同じ〕  
ここには兄妹相姦として捉えられうる兼雅とその異母妹の結びつきが叙べられており、このようなありかたがほかにも見出されるということは周知のごとくである。かような関わりを古代における近親相姦の一環としてかたづけられることはわれわれに親しい一般論であるけれども、そのまえにいま一度、このきょうだい相姦の内容について検討すべき余地があるように思われる。ところで、さきの宇津保物語蔵開下の巻にみえる「いもうとむつび」ということばをめぐって、かつて原田芳起氏は次のごとき指摘をなされている。

「いもうと睦び」を狭義に考えれば、〔宇津保〕の兼雅の大将とその異母妹の例、〔篁物語〕の篁とその異母妹の例、〔後撰集〕の「詠み知らず」の歌二首に知られる例などに限るべきか

と思うが、その周辺にさまざまのバリエーションを認めるべきであろう。そう拡大して考察すると、この「いもうと睦び」的な愛の様相は、かなり広般に中古文学にかかわって来るように思う。<sup>(1)</sup>

平安時代の文学を見わたすとき、「いもうとむつび」ということばをこのように概念化して用いる視座は、すこぶる有効なものと思われる。ここでは原田氏の驥尾に付きながら、禁忌の意味合いがよいと思われるきょうだい相姦という用語をさけ、概念として「いもうとむつび」ということばを用いたいと考える（以下、〈いもうとむつび〉と表記することとする）。そうして、現存するかぎられた範囲の物語作品の具体相に照らして、この概念の史的展開としての一面を跡づけてみたいと思う。

二  
むかし、おとこ、いもうとのいとおかしげなりけるを見をりて、  
うらわかみねよげに見ゆるわか草をひとのむすばむことを

しぞ思

ときこえけり。返し、

はつ草のなどめづらしきことのはぞうらなく物を思ける哉

〔天福本伊勢物語 四十九段〕

（いもうとむつび）の物語といえはまず思い起こされるだろうこの章段において注意すべきは、ふたつ——第一には、「おとこ」と「いもうと」のふたりに対して地の文に見られる待遇意識の差である。「いもうと」の返歌を有たぬ形の広本系においても存している「きこえけり」について、中相の「きこゆ」として理解しようとする仮説が示されているけれども、「いもうと」の耳に留まるようにしか自分の想いを伝えざるをえぬ「おとこ」のありかたには「いもうと」との間に何らかの隔たりを窺わせるものがあるうし、加えて、広本系などに「見て」という異同があるとはいうものの、「見をりて」という「おとこ」のありかたをやや低めた表現の存在をも考え合わせるべきであろう。したがって、「妹に対しての敬語で気になるところであるが、異腹の、男より身分の高い妹という設定である<sup>(3)</sup>」と社会的な身分の上下を示しているときまで断じえぬとしても、「いもうと」と「おとこ」との間の待遇意識の差を示していることばとして「きこえけり」を考える方が穏やかであると思われる。

第二に注意すべきは、琴の存在である。源氏物語総角の巻に見える「いもうとに琴教へたる所」という文言ともかかわって、この章段における琴の記述が云々されているけれど、さきの天福本のような形の本文であっても、琴の存在を連想することは不自然ではないのである。<sup>(4)</sup>「ねよげ」が「寝よげ」と「音よげ」を「ことをしぞ思

ふ」および「ことのはぞ」が「琴」をそれぞれ掛けた表現であることは、たやすく看取されよう。

ところで、平中物語に次のような章段が見出される。

…人まじりて、琴などをかしよう弾きて、ものをかしよういふ人ありけり。男、なほしもあらで、「この琴弾くはたれぞ」と、頼もし人に問ひければ、「ここに通はるる御親族などぞ」といへば、それに、この男、いかでかと思ふ心つきにけり。さて、このもとよりの人の聞くに、え気色ばみてはいはで、「おのが身は、いとくちをしく、いもうともなければ、この琴弾きたまふは、妹背山にやは頼みたまはぬ」と、男いへば、琴弾く女、「われも、せうとなきわびをなむする。寄せむかし」といへば、集まりて、いひすさびて、夜明けにければ、帰りにけり。朝に文どもやるとて、

くづれすな妹背の山の山菅の根絶えばかるる草ともぞなる返し、

山菅は思ひやまずのみ繁れどもなにか妹背の山はくづれむ

…  
〔平中物語 廿九段 日本古典文学全集〕

ここに登場する男女は、きょうだいではない。が、「このもとよ（男が言い寄っている）の人の聞く」のを憚って「え気色ばみてはいはで」、「いもうと」のない身のくちおしさと「せうとなきわび」を互いに言い交わして一夜を明かしたという叙述に添えられた男の和歌には、注目させられる。「根」および「草」ということばが、伊勢物語四十九段の贈答に見えた「ねよげ」——「いもうと」の和歌に見える「ことのはぞ」からの縁として——および「わか草」はつ

「草」を暗示しているように思われるからである。そうして、この廿九段で明示されている「琴弾く女」というありかたを慮るならば、伊勢物語四十九段の琴の存在を傍証するのみならず、さらに「へいもうとむつび」が琴を有つ可能性をも示唆するように思われる。

このような琴の存在にかかわって、さらに検討を加えるべき物語がある。周知のごとく、宇津保物語にはあて宮と仲澄の兄妹恋愛譚とでもいふべき叙述が見える。

またかくて、夕暮に、雨うち降りたる頃、中島に、水のたまりに鳩という鳥の心すこく鳴きたるを聞き給ひて、侍従、あて宮の御方におはして、かくきこえ給ふ、……ときこえ給へば、あやしうおぼして、いらへきこえ給はず。この侍従も、あやしきはぶれ人にて、よろづの人の、「婿になり給へ」とをさをさきこえ給へどもさもものし給はず、この同じはらにもものし給ふあて宮にきこえつかむとおぼせど、あるまじきことなれば、ただ御琴を習はし奉り給ふついでに、遊びなどし給ひて、こなたにのみなむ常にもものし給ひける。〔宇津保物語 藤原の君〕

同母妹であるあて宮に対する兄仲澄の懸想を叙べる最初の記事である。地の文に見えるあて宮と仲澄に対する待遇表現については後述することとして、さしあたり留意すべきは、仲澄が「御琴を習はし奉り給ふついでに」あて宮の居所に「常にもものし給ひける」という部分である。なにげない契機として琴がもち出されているようにも思われるが、「ただ御琴を習はし……」という措辞を考えに入れこれまで注意してきたわれわれの立場からするなら、琴を契機とする叙述は軽んぜられるべきでない。むしろ、ここに琴があらわれる

のは必然的とも捉えられるのである。

同母兄妹といひながらあて宮と仲澄のふたりに相互の隔たりを示す「きこえ給ふ」という待遇表現を用いることは、おなじ同母兄妹である八の君と仲澄の対話場面を照らし合せると、意味あることと解される。

かくのみ、この九の君を、よろづの人きこえ給ふとは知りながら、……よその人のさ思ほさむをばいかかはせむ、この源侍従の君さへ、かかる心のつきたるを、年ごろ思ひ忍び思ひ返せど、えあへかねてなむ、……思ひわづらひて、……その君に、この仲澄の侍従物語などし給ふついでに、……など、いとあはれに語らひきこへ給へば、八の君あやしき事とはおぼすものから、いとみじげに宣へばさすがにいとほしくおぼして、……侍従……と宣ふ。

〔宇津保物語 嵯峨の院〕

bのように整わぬ表現もあるけれど、a<sub>1</sub>からa<sub>3</sub>に見られるように仲澄に対する為手尊敬だけを用いた表現のあることは、看過しえぬのではあるまいか。

五月五日、つとめて、長く白き根を見て、侍従の君きこえ給ふ、

「涙川汀のあやめ引く時は人知れぬ根のあらはるるかな」  
ときこえ給へど聞き入れ給はず。侍従の君、……と、なくなくきこへ給へば、あて宮うち笑ひ給ひて、……など宣ふ。

〔宇津保物語 祭の使〕

八の君に対する場合とは異なって、あて宮に対するときの仲澄のありかたはc<sub>1</sub>からc<sub>3</sub>の表現からわかるようにやや低められている。

それはふからぬに見られるあて宮への待遇表現と対照的であろう。このような区別は、同母妹たるあて宮が兄仲澄の懸想の対象であるところに由来すると考えざるをえない。地の文に「きこゆ」を用いることで、両者に何らかの隔たりを設けようとしている——ここに、伊勢物語四十九段で問題となった「きこゆ」に通ずる点が見出されるように思われる。「いもうとむつび」の禁忌としての側面を鋭く意識させるように、言語のうえから隔たりをつくり出しているのである。

三

源氏物語玉鬘の巻で叙べられているように、玉鬘の居所は花散里の住まう「丑寅の町の西の村」である。このふたりを「あひ住み」という形に配したのは、光源氏と彼女たちの関係を対照的に設定しようとする意図のあらわれであるように思われる。男女関係に至りそうまで至らぬ玉鬘と光源氏の関係は「さすがなる御仲」(蜩)「世づかずむつかしき御かたらひ」(常夏)などと評されている一方、花散里と源氏の関係は「今はただおほかたの御むつびにて、御座なども異々にて大殿籠る」(蜩)ありかたであると叙べられる点に、象徴的に窺われるであろうか。ここではひとまず、後者の関わりから見ていこうと思う。

夏の御住ひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざとこのまじきこともなく、あてはかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心の隔てもなく、あはれな

る御なからひなり。今は、あながちに近やかなる御ありさまももてなまじきこえたまはざりけり。いとむつまじくありがたからむ妹背の契りばかり、聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。標は、げにはほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり、やしきかたにあらねど、えびかづらしてそつくりろひたまふべき、われならざらむ人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にてわれにそむきたまひなましかば、など、御対面のをりをりには、まづわが御心の長さも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなりとおぼしけり。こまやかに、ふる年の御物語などなつかしく聞こえたまひて、西の村へわたりたまふ。

(源氏物語 初音 新潮日本古典集成、引用は以下同じ)  
お互いの心になんの懸隔もなく「あはれなる御なからひ」であると言ひ手の側からいわば客観的に示される源氏と花散里のありかた(a)は、彼自身の主観を通して、自己の「心の長さ」と花散里の「心の重き」ありやうとが対比されるような互いの精神のレベルにおける関わりとして、「思ふやうなり」ということばで捉え直されている(c)。このようなふたりの関係を如実に示すのが、「いとむつまじくありがたからむ妹背の契り」(b)であろう。それでは、「妹背の契り」とは何か。

おなしころせうとにせむといひたる人の、久しうをともしぬに  
いつのまにいくへかすみのへたつればいもせの山のかたはみえ

ぬそ

〔榊原家本和泉式部集 七二八 私家集大成〕

はらからなどいはむといふ人のしのびてこむといひたるか

へりことに

相模

あづまぢのそのはらからはきたりともあふさかまではこさじと

ぞ思ふ 〔後拾遺集 卷十六 雑二 九四一 新編国歌大観〕

さきにふれた平中物語廿九段の例も加えて、いずれの例も実際にはきょうだいにあらざる異性どうしが互いに「いもせ」あるいは「はらから」としての関係を約することにより、少なくとも表面上は肉体的関係にまでは至らぬ結びつきを保とうとしたありようを窺わせる。「いもせなどいひつけてかたらひはべりける」〔後拾遺集 雑五

一一五五詞書〕清少納言と橘則光の関係をしるす枕草子の詳述をここに引くまでもなく、肉体的ならぬ精神的なレベルにおける関わりを志向する異性の約束として「妹背の契り」は理合せられるであろう。したがって、源氏物語初音の巻でふれられる「妹背の契り」とは、諸注のいうような夫婦の約束でなく、むしろ異性のきょうだいとしての約束を意味するように捉えられる。源氏物語に見える「妹背」ということばがきょうだいの意に解せられる事実とも矛盾しないのである。<sup>(6)</sup>

さて、このような「妹背の契りばかり、聞こえかはし」ている花散里と源氏のありかたと対照的な、玉鬘と光源氏の関係は、どのよう

に形象されているのであろうか。  
たぐひなかりし御けしきこそ、つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ。

うちとけて寝も見ぬものを若草のことあり顔にむすばほる

らむ

をさなくこそものしたまひけれ。

と、さすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて……

〔源氏物語 胡蝶〕

胡蝶の巻の終わり——玉鬘のもとに贈られた後朝めいた光源氏のこの和歌に、河海抄以来注されるごとく、伊勢物語四十九段の男の和歌を透かし見ることはたやすい。しかしながら、胡蝶の巻における四十九段の撰取は、一見たんなる引歌の段階として捉えられるこの一箇所だけにとどまるものでなく、巻全体にわたって考えるべき性質を有つように思われる。

君はうちそむきておはする、側目いとをかしげなり。……他人と

見なさむは、いとくちをしかべうおぼさる。右近も、うち系み

つつ見たてまつりて、親と聞こえむには、似げなう若くおはし

ますめり、さし並びたまへらむはしも、あはひめでたしかしと、

思ひるたり。 〔源氏物語 胡蝶〕

玉鬘に対する光源氏の心境が、父親代りとしての立場からのものでなく、男女関係に一步立ち入った立場からのものであることが認められよう。他方、「右近も」によつて導かれる他者からの思惟によつて確認されてもいる（e）、このような彼の自発的な想い（d）の核心は、「他人と見なさむは、いとくちをしかべう」と叙べられている。ここに「ひとのむすばむことをしぞ思ふ」という四十九段の男の和歌の下旬をおもうのは、深読みに過ぎるのだろうか。

殿は、いとどらうたしと思ひきこえたまふ。上にも語り申した

まふ。……ただにしもおぼすまじき御心さまを見知りたまへれ

ば、おぼし寄りて、「ものの心得つべくはものしたまふめるを、うらなくしもうちとけ、頼みきこえたまふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、……あな心疾とおぼいて、「うたてもおぼし寄るかな。いと見知らずしもあらじ」とて、わづらはしければのたまひきして、心のうちに、人のかうおしはかりたまふにも、いかがはあべからむとおぼし乱れ、かつは、ひがひがしうけしからぬわが心のほども、思ひ知られたまひけり。

〔源氏物語 胡蝶〕

玉鬘を話題にのぼせる言葉から彼の心のうちを推測する紫の上の応答（f）を通して、さきに見えた玉鬘に対する自発的な想いを自覚するに至る光源氏が、描かれている（g）。右近の目を通して読者に確認されていた彼の心根が、紫の上の「心疾」き「おしはかり」によつて今度は光源氏自身にも確認しうるものとして顕在化されていくのである。このような認識を促す紫の上の「おしはかり」のこゝとばづかいに、物語は「うらなくしもうちとけ、頼みきこえたまふらむこそ心苦しけれ」という。ここには、「うらなく物を思ひける哉」という四十九段の「いもうと」の和歌の下句を看とることができるとはでないか。この物語の作者は、すでに若紫の巻で光源氏と若紫の關係に奥行を与えるために、また、総角の巻でも匂宮と女一の宮の対座の場面の小道具とするために、伊勢物語四十九段に深くかかわっている。さらに、そのいずれの関わり方も、定家本のごとき贈答を有つ形の章段を窺わせるものであつた。いま、胡蝶の巻に見出せる四十九段の撰取のありようも、こうした埒外に出るものではないように思われる。というよりむしろ、胡蝶の巻にはほぼ等間

隔に見られるこれら二つの叙述が、後出するものほど四十九段を踏まえる表現をあらわにしていくことを考えると、この物語の作者によつて意図的に配せられたものと捉えるべきなのであろう。玉鬘と光源氏の關係は、伊勢物語四十九段の「いもうと」と「おとこ」の關係を重ね合せるように配慮されているのである。

をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、……しばしも弾きたまはなむ、聞き取ることもやと心もとなきに、この御ことによりぞ、近くゐさり寄りて、「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」とて、うち傾きたまへるさま、火影にいとつづくしげなり。

〔源氏物語 常夏〕

和琴に対して示される玉鬘の並ならぬ関心——このあと、「今は御琴教へたてまつりたまふにさへことつけて、近やかに馴れ寄りたまふ」光源氏の姿を語りつき、

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしきこちしたまふに、忍びかねつつ、いとしばしばわたりたまひておはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜は疾く入りて、すこし雲隠るるけしき、萩の音もやうやうあはれなるほどになりけり。御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。

〔源氏物語 篝火〕

という彼と玉鬘のありさまを、物語は描く。これらに見える琴に執した場面設定は、胡蝶の巻で形象されたふたりの關係に思いをいたすならば、故なきことであると見過ごすわけにはいくまい。伊勢物

語四十九段の陰翳は、ただ胡蝶の巻のみにとどまらず、それ以後の巻々にも見出すことができるのであった。

かくて、伊勢物語四十九段を換骨奪胎しながら展開される玉鬘をめぐる物語は、篝火の巻の終わりに於いて転機を迎えるように思われる。

(源氏からの) (玉鬘のいる西の村)

御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられて

(源氏は)

ものする」とのたまへれば、うち連れて二人参りたまへり……

(夕霧・柏木・弁の少将)

御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、盤

渉調にいとおもしろく吹きたり。頭の中將、心づかひして出だ

し立てがたうす。「遅し」とあれば、弁の少將、拍子打ち出でて、

忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。二返りばかり歌はせた

まひて、御琴は中将にゆづらせたまひつ。げにかの父大臣の御

爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。「御簾のう

ちに、ものの音聞き分く人もしたまふらむかし。今宵は盃な

ど心してを。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬ

こともこそ」とのたまへば、姫君(玉鬘)もげにあはれと聞きたまふ。

〔源氏物語 篝火〕

玉鬘の居所である西の対にいる源氏からの案内で、夕霧と柏木・弁の少將兄弟が参上する。折しも、戯言めくとはいいながらも自らを「盛り過ぎたる人」と規定する光源氏のありかたは、彼自身手づから弾いていた和琴を「中将にゆづ」ったという琴の移譲とあいまって、じつに興味深い。すなわち、中年にさしかかった光源氏の若さからの退場を意味するとともに、それとは対照的に登場する三人の若者を卓立させていく展開は、新しい(いもうとむつび)として

の物語の始まりを告げるように捉えられるからである。

夕霧の視線に導かれるように展叙される野分の巻のあと、行幸の巻は、

かくおぼしいたらぬことなく、いかでよからむことはと、おぼしあつかひたまへど、この音無しの滝こそ、うたていとほしく、南の上の御おしはかりごと(南の上の御おしはかりごと)にかなひて、軽々しかるべき御名なれ。

と語り起こされる。「南の上の御おしはかりごと」というのは、勿論、胡蝶の巻での紫の上の「心疾」き「おしはかり」であろう。かの伊勢物語四十九段を想起させる「うらなくしもうちとけ……」という言葉を冒頭において暗示することは、決して軽んずべきでないだろう。同じ巻の終わり、近江の君と柏木・弁の少將の姉弟不和の場面(9)をあらわに踏まえる意匠と合せ、きょうだいの存在を強調していると目されるのである。行幸の巻に首尾あい応じて強調されるきょうだいへの志向は、したがって、胡蝶の巻に見出された伊勢物語四十九段の引用を契機として位置づけ、よりひろい玉鬘をめぐる(いもうとむつび)の物語へとひらかれる構造を窺わせるものである、といわねばならない。

#### 四

藤袴の巻に入ると、行幸の巻でとりあげられた玉鬘の尚侍任官が



すでに実現していることとともに、夕霧の参議への昇進をはじめて知らされる。これまで異母姉として接してきた玉鬘がじつはいとこであるという事実を父源氏から知らされ、真相に思い寄らなかつた己れに「しれじれしきこち」を覚えたものの、改めて彼女に想いを懸けたりすまいと思ひ返す夕霧の「ありがたきまめしき」が、行幸の巻で確認されていた。ところが、父の使いとして自分と同じく大宮の喪に服している彼女を訪れた際、彼は意中をうちあけてしまふ。

かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを  
持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧  
ずべきゆゑはありけり」とて、とみにもゆるさで持たまへれば、  
うつたへに思ひも寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかことばかりも  
「道の果てなる」とかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、  
見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば薄紫やかことならまし  
かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」とのたまへば、  
すこしうち笑ひて、……など、こまかに聞こえ知らせたまふこと  
多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。(源氏物語 藤袴)  
ここに見える夕霧の和歌に、契沖が、

一 野おなし野の露にやつる。○今案、うつほ物語に  
おなし野の露はいつれもとまらねとまつきゆとのみ聞かく  
るしき

此哥をおもへるにや (源註拾遺 契沖全集第九卷)

と慎重な物言いで注しているのは、すこぶる重要である。この和歌は、すでに東宮への入内を了えたあて宮と仲澄の最後の贈答の場面に見える、あて宮のものである(あて宮「彼女の和歌に同母兄妹を示すものとして用いる「同じ野の露」という表現を、夕霧の和歌では、祖母である大宮の喪に同じく服する玉鬘と自分をさす表現として使っている。そうして、なお、この引歌の見えるあて宮の兄妹には決定的な隔たりがあり、これが藤袴の巻のいとこの間にも認められる点に、留意しておかねばならぬ。かの巻でついに実現した東宮妃としてのあて宮と仲澄の関係が、この巻では「尚侍の君」玉鬘と夕霧のそれとして見透かされるであろう。藤袴の巻で玉鬘の尚侍任官の事実がはじめて明かされる点は、決して軽んずべきではないのである。草物語に見られる、「大学の衆」たる自身を「かすならばか、らましやは世の中にいと悲しきはしづのおだまき」と嘆く輩と、母親の「内侍になさんの心」を帯びた異母妹の間に存する隔たりも思い合せられる。あるいは、さらに伊勢物語四十九段の「いもうと」と「おとこ」の関係をも。

すると、藤袴の巻にはじめて尚侍として登場する玉鬘の意味は、宇津保物語あて宮の巻を念頭に置いて説くようなレベルにとどまるものではなく、(いもうとむつび)の展開の過程における一齣として理合せられ説かるべき性質のものである、と思わざるをえない。つまり、(いもうとむつび)に見られる「いもうと」の待遇の高さは、宇津保物語や源氏物語といった作品の具体相において、天皇あるいは東宮に結びついた立場として顕在しているのである。

伊勢物語に見られる(いもうとむつび)とは、「おとこ」のいわ

ゆる色好みとしてのありかたの一翼をになう要素として機能し、<sup>(11)</sup> 宇津保物語におけるあて宮と仲澄の(いもうとむつび)は、東宮妃にまでなったあて宮という女性の卓抜したありかたを説く要素として機能していると思しい。これらに対して、源氏物語のいわゆる玉鬘十帖に見られる(いもうとむつび)というのは、先行する伊勢物語や宇津保物語を旺盛にとりいれながら、きょうだいの関係を擬装された父娘の<sup>(12)</sup> 関係に重ね合わせることで、光源氏と玉鬘の官能的な関わりを描く一方、きょうだい関係にある人びとを改めて卓立させていくことで玉鬘の「女の御心ばへ」(藤袴)に焦点を合せようとしている。<sup>(14)</sup> そうして、男女の肉体的な関わりかたを避けた精神的な関わりかたを描くことに参与しているのである。ここに、あらたな(いもうとむつび)の姿を見出すことができる。

ただし、(いもうとむつび)の展開は、この藤袴の巻にいたるまでの成果をなおざりにして語ることでできぬところに来たつたといえよう。

注

- (1) 原田芳起 「中古文学語彙雑考(十二)——いもうと・せうと——」『平安文学研究』第六十六輯 一九八一年十一月
- (2) 片桐洋一 「うらなく物を思ひけるかな——第四九段の解釈をめぐる——」『伊勢物語の新研究』第五篇第一章 明治書院 一九八七年九月
- (3) 石田稔二訳注 『新版伊勢物語』(角川文庫 一九七九年十一月)

月)五二頁 脚注三

(4) 片桐洋一 「伊勢物語の研究(研究篇)」(明治書院 一九六八年二月)二二一―二二二頁

(5) 三卷本枕草子 七十七段・七十九段(和泉古典叢書による)

(6) 原田芳起 「いもせ語義弁証」(『平安時代文学語彙の研究(続編)』第四章 風間書房 一九七三年十一月)

平野由紀子 「『いもせ』考」(『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第四号 一九七三年六月)

(7) 島津久基 「『源氏物語講話 若紫』(名著普及会 一九八三年五月復刻)五八―五九頁

玉上琢彌 「源氏物語評釈 第二卷」(角川書店 一九六五年一月)四八頁、「同 第十卷」(角川書店 一九六七年十一月)四六六―四六七頁

(8) 片桐洋一 「源氏物語における伊勢物語——その影響と方法についての覚え書——」(『解釋と鑑賞』第三十三卷第六号 一九六八年五月)

(9) 天照大神の天石窟隠れにまつわって、花鳥余情は常夏の巻に、御前の御あそひにもまつふんのつかきをめすは人のくに、

はしらすこ、にはこれを物のおやとしいたしたるにこそあらめれ

和琴は伊弉諾伊弉冉の二神の御代よりいてきたるうつは物とはいへとも日本紀などにはみえ侍らす又天岩戸に天照大神のこもり給ふ神宴よりいてきたりともいへり……

〔源氏物語古注集成一〕

と、和琴の起源伝承を注する。(「いもうとむつび」)を考ふるう  
えで、じつに示唆ふかい言及であるように思う。

また、系譜的には、琴歌譜に収められている歌謡を冒頭に有  
つ軽太子・軽太郎兄妹の説話にまで溯りうるだろう。

(10) 後藤祥子 「尚侍攷——朧月夜と玉鬘」(『源氏物語の史的  
空間』 東京大学出版会 一九八六年二月)

(11) 片桐洋一 「現存本伊勢物語の成立」(『伊勢物語の研究(研  
究篇』第四篇 明治書院 一九六八年二月)

(12) 片桐洋一 「昔物語の方法——主として色好みの扱いに關連  
して——」(『國語國文』第三十二卷第四号 一九六三年四月)

(13) 秋山虔 「玉鬘をめぐる」(『源氏物語の世界——その方法  
と達成——』 東京大学出版会 一九六四年十二月)

森一郎 「玉鬘物語の構想について——玉鬘の運命をめぐる  
て——」(『源氏物語の方法』 桜楓社 一九六九年六月)

増田繁夫 「春秋の争い——玉鬘・初音・胡蝶」(『國文學』  
第三十二卷第十三号 一九八七年十一月)

(14) 森一郎 「藤袴卷末をめぐる——玉鬘物語の世界——」  
(『源氏物語の方法』 桜楓社 一九六九年六月)

附記——本稿は、平安時代後期の(「いもうとむつび」)に關する統  
稿を俟ってひとつになる。

国語国文学研究室受贈図書目録四

(一九八七年七月—一九八八年七月)

○定期刊行物(4)

研究年報(鹿児島県立短期大学地域研究所) 第16号

研究年報(帝塚山学院短期大学) 第35号

言語文化(一橋大学) 第24号

皇学館大学紀要 第26集

皇学館論叢 第20卷第4、6号・第21卷第1号

高知大國文 第18号

甲南國文 第35号

語学と文学(九州女子大学) 第18号

語学文学(北海道教育大学札幌分校) 第26号

語学文学研究(金沢大学教育学部) 第17号

国学院雑誌 第88卷第4、12号

国学院大学紀要 第25輯

国語学研究と資料(早稲田大学) 第11号

国語国文(金沢大学文学部) 第13号

国語国文(東海学園) 第32・33号

国語国文(立正大学) 第24号

国語国文(昭和学院短期大学) 第20号

国語国文学(福井大学) 第26号

国語国文学(名古屋大学) 第60・61号

国語国文学云誌(学習院大学) 第31号